

パンの皮 クロアチア

昔むかし、あるところに、貧しい男がいました。男には、暖炉にくべるまきもなけりや、食べる物も、パンの皮しかありませんでした。

ある日、男は、森へ少しばかりまきを切りに行きました。そして、お弁当のパンの皮を木の枝につるしておいて、まきを切り始めました。ところが、男が働いているうちに、いつの間にか、悪魔の若いのがやって来て、パンの皮を盗んで食べてしまいました。

やがて、男はちよつと一息入れてパンの皮を食べようと思いました。ところが、木のところに行つてみると、パンの皮の影も形もありません。男は、肩をすくめて、

「おやおや。おれよりもつと貧乏なやつが、食べちゃったんだな」と思いました。そして、また仕事にとりかかりました。

ところで、悪魔の若いのがうちに帰ると、悪魔のじいさんが、

「一日じゅうどこにいたんだ。何かうまいことやったのか」とききました。

悪魔の若いのは、得意になって、

「貧しい男がまきを切つてるあいだに、そいつのパンの皮を盗んで食べたのさ」といいました。悪魔のじいさんは、若いのをしかっていいました。

「その貧しい人のところに行つて、一年間奉公するんだ。そのうちで働いて、パンの皮のぶんを返してこい」

悪魔の若いのは、がっかりして、貧しい男のところに行つて、

「どうか、一年間、奉公させてください。森でかっぱらつて食べちゃった、あのパンの皮のぶんを、おたくで働いてお返ししたいんです」といいました。男は、

「いったいうちで何の仕事をするんだい。おれだって、する仕事がないのに。おまけに食べる物だつてなんにもないんだよ」と答えました。けれども、悪魔は、いいました。

「まあ何もおっしゃいますな。万事うまくいきます。わたしはわたしの仕事を見つけますから」

男は、まあなんとかなるだろうと思って、承知しました。

近所の人たちは、貧乏人のくせに奉公人をやとつたといつて、笑いました。

「奉公人なんて、何をさせるんだい。自分だって、なんにもやることがないのに！」

ところで、まずしい男には、畑といつても、何の作物も取れない砂地しかありません

でした。春になると、悪魔はそこをたがやし始めました。男が、「そんなことしてもむだだよ、何も実らないよ」といっても、悪魔は耳をかきません。どんだんたがやしました。その年は、雨が多くて、砂地でも今までになくたくさん的小麦がとれました。

男と悪魔は、小麦を打って穀物小屋に運び終えると、やることなくりました。すると、悪魔が、

「今度は、伯爵のところで働きましょう」といいました。ふたりは、伯爵の屋敷に行きました。男は、伯爵に、自分たちが麦打ちをしますと申し出て、

「お給金は、うちの奉公人が背中に背負えるだけの小麦でけっこうです」といいました。

伯爵は、心の中で、

「こいつの奉公人はやせていて弱そうだから、どうせたいして運べないだろう」と考えて、それを承知しました。

悪魔は男に、

「小麦を打つのはおれひとりです。あなたは、うちに帰って、村じゅうからありったけのシートを集めてぬいあわせてください」といいました。

悪魔は、伯爵のたくさん的小麦を、あつという間に打ってしまいました。そして、男は、ぬいあわせたシートを持ってきて広げました。ふたりは、シートに、小麦をあげ始めました。伯爵は、にやにやして、

「こんなやせっぽっちに何が運べる。からのシートだって運べるもんか」と思いました。ところが、ふたりは、その大きなシートに、山のような小麦をぜんぶあけてしまいました。

悪魔は、シートの四隅をつかむと、背中にふり上げて歩きはじめました。伯爵はあわてましたが、約束ですから、とめるわけにはいきません。そこで、飼っているあばれ牛を悪魔に向かって放し、角でつき殺させようと思いました。あばれ牛は、つつこんでいきましたが、悪魔はちらりと見ただけで、あばれ牛の角をつかんで、自分の肩に放り上げました。

伯爵は、今度は、あばれ馬を放しました。あばれ馬はつつこんでいきましたが、悪魔は、こいつもつかまえて、自分の肩に放り上げました。

伯爵は、最後に、あばれ豚を放しました。悪魔は、こいつもつかまえて、肩に放り上

げて、どんどん歩いて行きました。

こうして、悪魔は、小麦と牛と馬と豚を、貧しい男のうちに運びました。悪魔は男に
いいました。

「これで、あなたからかっぱらったパンの皮のぶんを、働いてお返ししました。これで
うちに帰れます」

おしまい

村上郁再話

資料『世界の民話16 アルバニア・クロアチア』飯豊道男訳／ぎょうせい